

## カナダ アンクライマブルズ圏谷での登攀

1999年6月14日～7月20日

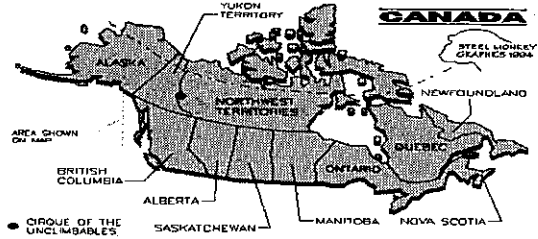
小林 亘 (春日井山岳会)

はじめに

私たちは人里を遠く離れ、まだ多くの人の手に触れられていない自然のままの岩壁を、既成のスタイルにこだわらず自分達の手でフェアに登ろうと出かけて行った。そのフィールドとして、アンクライマブルズ圏谷の山々は私たちの

期待以上に素晴らしい場所であった。そのむき出しの大自然のなかで、各メンバーがそれぞれに大きな収穫を得て、無事に山行を全うすることができた。

既に2年が経過しており、レベル的にもニュース性はないが、この山行に込めた思いと活動は語るに足ると思ったので、自分の手記から報告する。



留守本部	野呂 邦彦 (鈴鹿アルパイン)	
メンバー	小野木 巧 (御在所エスカラッド)	小林 亘 (春日井山岳会)
	行広 学 (御在所エスカラッド)	高津 充於 (春日井山岳会)
	加田 省吾 (御在所エスカラッド)	前川 敏一 (春日井山岳会)
	黒田 誠 (関西登高会)	

## 登山期間中の気象状況

登山活動を行った27日間に雨または雪で行動できなかった日が約10日と、計画段階では予想していなかった不安定な気象状況であった。ラジオ放送の電波は届かず、気象の変化を気圧の観察と観天望気ですら予測しようと努めたが、最後まで十分な予測はできなかった。ただ、雲が西から東へ流れるときはおおむね良い傾向で、逆の時は悪い傾向にあると感じられた。季節は雲の様子や植物の色の变化、花の咲く様子から、6月中が早春から春、7月に入って夏になったという印象であった。

## 登山の概要

ロータスフラワータワーに全員が登頂。加田、黒田組は寒気の中1ピヴァークで、小野木、行広組はやはり寒気の中、降雪のためテラスでの停滞1日を含む3日間で粘り勝ち。高津、前川、小林組は温暖な天候と前2チームの情報に支えられ、上部のスラブで一時雨に降られながらも24時間登り続け

て登頂、36時間動き続けてベースに戻った。

加田、黒田組はバSSLタワーに5.10 A 3, 13ピッチの新ルート<BEPPIN>を開いて登頂。1日のフィックス工作後4晩をポータレッジで過ごし、脆いクラックを含むデリケートな登攀となった。

高津、前川、小林組はハリソンズミス東北面に見いだしたラインに9ピッチ伸ばすも、見込み違いによる日程の不足に度重なる荒天も手伝い、ファイナルプッシュの3日目に登攀続行を断念し退却した。

### 行動手記

6/14 ホワイトホース空港にて黒田合流。セスナを頼んだ Kluane Airways のアンディーが迎えに来てくれていた。

6/15 ホワイトホースにて食糧、燃料等買い出し。

6/16 アンディーのバンで8時間かけてフィンレイソンレイクへ移動、ここから水上セスナで登山の起点となるグレイシャーレイクへ、人と荷物を2組に分けて移動。所要1時間半だが、セスナが他の客を送迎してから2組目を運んだので全員が集めたのは8時間後であった。

6/17 黒田フェアリーメドウまで荷揚げ。フェアリーメドウにはケベック人の2人チームがいたとのこと。加田、小野木、行広はブライトネル川沿いに1時間ほどの所まで荷揚げ。高津、前川、小林は湖畔のキャンプを快適に過ごせるように整備。

6/18 全員で食糧を中心に、フェアリーメドウまで荷揚げ。

6/19 全員で登攀具を中心に、フェアリーメドウまで荷揚げ。ほとんどのメンバーがこの日は30kg超の荷を担いだ。15時過ぎから激しい雨が断続的に降り、雨宿りしながらの辛い1日となった。

6/20~22 断続的な雨が続き、湖畔に釘付けとなる。湖はテントを移動しなければならないほど、川は徒渉できないほど増水した。雨間をみて湖畔に残置されていたカヌーで対岸の朽ちた小屋へ渡り、ノコギリや木の椅子を持ち帰る。椅子が一脚あるだけで野性的なキャンプがぐっと文化的になった。22日には食糧が底を突いたが、小野木さんや高津君が魚を釣って、高津君がプロの腕でさばいてくれたので、食卓は華やかだった。

6/23 やっと晴れた。全員で湖畔のキャンプを撤収してフェアリーメドウへ移動し、ベースキャンプを設営した。天国みたいなこの草原の名前を、大汗かいてほっかしてきた英和辞書でひいてみた。Fairy-妖精。Meadow-園。妖精の園か！ここにぴったりの名前じゃないか！でもちょっと待てよ、妖精のあとになんか書いてあるぞ。

「Fairy-妖精。特殊な魔力があり、時々人間にいたずらするとされている。」

うーん、なんだかとっても気になるぞ！

6/24 小林、高津、前川、ハリソンズミス北面、ヒューイスパイアーを偵察。ケベックチームがミ

## 5. 登山記録

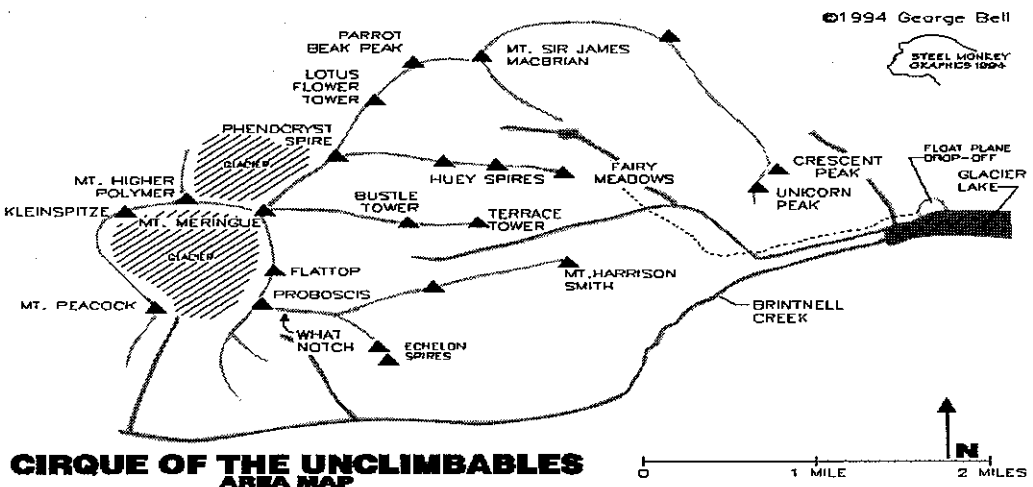
ドルヒューイスパイアに登っているのが見えた。双眼鏡でやっと人の姿が見える程度で、壁がとても大きいことに気付いた。加田、黒田、小野木、行広、ロータスフラワータワー偵察、基部へ装備を荷揚げ。

6/25 小林、高津、前川、ハリソンスミス東壁に昨日見出したラインに取り付く。下から見て思う以上に草や土の詰まったクラックに、笠が岳の穴毛谷を思い出す。3 P目を登りだすとなんと上の小さな草付にヤギがいてこっちを見ている。動くたびに石が落ちてくるので「シッシッ！」と追い払うと、横のもっと小さな草付に飛び移り、さらに飛ぼうとしてヒザを曲げた瞬間、草付が剥がれた。スラブの上で2、3回転したあと高津、前川の頭上を飛び越えて取付まで空中を落ちていった。気の毒なことになって心が沈んでしまったが、3人とも無事でほっとした。

予定の白いコーナー基部までは届かず、4 Pフィックス。小雨がばらつく中を下降。加田、黒田、ロータスフラワータワー5 P目で雪に降られ、4本のフィクストローブを残して引き返す。小野木、行広、レスト。

6/26 終日雨で全員レスト。

6/27 快晴となる。小林、高津、前川、ハリソンスミスへ、ポータレッジと食糧3日分を持って取り付く。先日の最高到達点から、スカイフックを支点にしたテンショントラバースで白いコーナー基部につながるクラックを辿る。コーナー基部へ全員集合したその時、突然猛烈な雨が降りだす。レインウエアを取出す間も無く、全身ずぶぬれとなり、荷物を残置して一旦退却。前川君のカメラが濡れて壊れてしまった。ミドルヒューイスパイアの新ルートにトライしていたケベックチームは、頂上まで延びていると思っていたクラックが途切れて登れなくなったので降りてきたとのこと。



- 6/28 晴天となるが、道具を干して一日が終わった。22:00より雨。
- 6/29 終日雨。晴れてくれとただ祈りながら暮らす。
- 6/30 朝から14:00まで雪が降る。雪があがるころ、ケベックチームが体より大きな荷物を背負ってグレイシャーレイクへ下って行った。とても元気ない奴等だった。
- 7/1 雨後快晴。道具の整備をして明日から登れるように準備する。登攀中の天候急変に対処できるように、大きめのチョークバッグを利用してクイックキャッチシステムを考案。アンカーにぶら下がっている間、ラバーソールシューズだけ履いている足もとが寒いのでパイルソックスのつま先を破ってアンクルウォーマーを作る。なんとなれば靴の上から覆ってしまえるすぐれ物。ついでにロングスパッツも雨対策用に改造した。エイダーに乗ったときにも足が痛くないように靴底にまわすストラップの付け根の尾錠を金ヤスリで切り取り、小さいラバーソールシューズにフィットするように新たに紐をぬい付けて絞るようにした。こういう作業をするとめらめらと闘志が湧いてくるのを感じる。
- 7/2 3:00起床, 5:00に登り出す。5 P目終了点で残置した荷物を回収, パッキングをしなおして, 前川リードで6 P目の凹角を登る。おおむねフィストサイズのクラックは湿って, 苔が生えていた。7 P目, 下向きのフレックを右ヘトラバース後, シンクラックをエイドクライミング。クランク状のルーフ下でハンギングビレイ。8 P目脆いクラックからフェースに難儀する。前川22時過ぎまで奮闘するも2/3ほどであきらめてローダウンし, ビレイ点を整備して, ポータレッジを設営する。発狂しそうなほど面倒な作業で時間を食い, 眠りについたのは2:00だった。小野木, 行広組はロータスの大テラスまで。
- 7/3 前日の22時間行動がたたり, ポータレッジの寝心地が最高なもの手伝い, 10:00ごろまで寝てしまう。また気の遠くなるような撤収と登攀準備をして, 昨日ののこりを前川案外スムーズに片付け, 高津にリードを交替。脆い部分のあるシンクラックを「こわいなあ」ともらしながら行く。20mほど登ったところでとても冷たい風がグレイシャーレイクから吹き始め, 雪も本格的に降り出す。それでも不屈の高津は登り続け, ボルトを2本埋めて後続を迎えた。後続もユマルが滑るし, 手足の感覚はなくなるので厳しい1ピッチになった。ここでまたポータレッジのビバークを設営。幸いこのときだけ雪が止み, 昨日よりは手際よくいったがまた寝たのは2:00時, 1日目のオーバーワークから悪循環してしまっている。ポータレッジは昨夜の場所に張ったままにすればよかった。小野木, 行広組はロータスの大テラス上部3ピッチをフィックス。
- 7/4 また10:00ころに目覚め, フライをめくると, 妖精のいたずらか圏谷は一面銀世界であった。空は青いけれど壁の上方の大凹角からは雪がばらばら落ちてきている。あつけにとられ, この壁を登ろうとしている自分たちは今, いったい何がどういう状態だと思えばいいのかさえ

## 5. 登山記録

わからなくなってしまった。判断ができないということは恐ろしい事だ。そこで3人で気の済むまで話し合った。まず、自分たちの体には十分な余力があって、もっともっと登りたいという強烈な思いがあった。だいいちオレなんかまだ草付混じりのピッチしかリードしてないし、前川君達みたいにカッコいいピッチも登りたいよお！なんてガキのような気持も少しあった。しかしその対極には、この壁を抜けるまでまだ10ピッチはあると思われること、昨日までの登攀のペースはあと4～5ピッチの間は変わらないと思われること、同ルートの懸垂下降まで考えると食糧が確実に不足していて、天気待ちの停滞にでもなればなおさらだという事実があった。人里から隔絶され、天気の予測が全く不可能で、フリースとヤッケを着込んでも寒いこの地では重い事実だった。

13:00、敗退を決して下降を始める。ほっとしたような気分の裏に、考えが甘かったのだという怒りに近い後悔を噛み殺しながら、下降用の支点を作ることを繰り返した。22:00取付着。加田君が迎えに来て、ベースへのぼっかを手伝ってくれた。岩小屋では黒田君が加田君と合作のカレーライスとプリン・ア・ラ・モードを用意して待っていてくれた。ひとさじ口に運ぶごとに、友情の味がしぼんだ心にひろがった。小野木、行広組は降雪のためロータスの大テラスで停滞。

7/5 レスト。加田、黒田はバスルタワーの新ルートへ取り付いた。7/3にフェアリーメドウへ登ってきたスイスの3人チームと話す。こちらもケベックチーム同様にフレンドリー、気は優しくて力持ちのクライマーだった。南米エクアドルを皮切りに7カ月登山を続けてきているとのこと。この日はロータスフラワータワーの3P目までフィックスしてきていた。小野木、行広組はロータスを完登。夜中の2時過ぎにベース着。

7/6 レスト。あかざれだらけになった手は今日1日の養生で治りそうだ。加田君達からの無線を取りながら、スイスチームがロータスを登っている様子を双眼鏡で観戦する。核心の50m一杯のピッチでもリード25分、フォロー12分のペースでとばしている。結局10時間で登りきった。15時頃には我々の岩小屋に帰って来て「長い1日だった。」と言いながら疲れてもいない様子。大したやつらだ。我々はフィックスドロップなしのワンプッシュに挑戦することにした。加田、黒田組は脆いクラックに難儀しながら2ピッチ伸ばした。

7/7 2時起床。1時間20分でロータス基部着。5:40登攀開始。遅れて取り付いたアメリカチームの2人はこちらから声をかけてもろくな受け答えをせず、なんの挨拶もなく抜きにかかった。危険なので仕方なく先に行かせるためしばらく待つ。大テラスまではいいペースで登り念のため持参したビバーク用具と食糧を残置した。13ピッチ目、50m一杯のスラブをリード中に本降りの雨に降られ、底知れぬ恐怖を味わう。シンクラックにスモールストッパーでランニングピンをとるが、ギアを節約するためにランアウトしながらのクライミングだった。

一歩一歩が大博打の気分で、濡れた石英に立ち込むたびに気合と悲鳴兼用の声が出た。16P目核心のルーフは疲れが出始めたか、時間を食う。続く50m一杯のハンドクラックは、既に夜中の1時過ぎ、白夜と言ってもさすがに薄暗く、クラックの中のチョックの効きを確かめづらくて怖かった。最終ピッチの19ピッチ目、「最後にこれか！」と言いたくなるスクイズチムニーでしごかれた。

- 7/8 5:15頂上着。24時間を僅かに切ったが、ロータスのでっぺんでご来光を拝むとは思わなかった。景色を眺め、写真を取りながら7:00まで過ごした後、ロープの引っ掛りに神経を使いながらの懸垂下降を始める。多くのクライマーが泣かされたようで、クラックの中にはちぎれたロープの切れ端がたくさん引っ掛かっていた。

大テラスで残雪を融かしてお茶を飲み、後半の下降のために気合を入れなおした。ほとんどのピッチは壁に向かってルートの右側に下降用の支点が続いており、上手く下降できた。途中のメドウまでスイスチームが迎えにきてくれて、「おめでとう、よくやった！」と祝福してくれた。10時間で登った彼等に言われるのも照れ臭かったが、彼等の温もりが胸にじんときて素直な気持ちでありがとうが言えた。おまけにザックを担いでいってやると言ってくれたが、最後まで自分たちでやりたかったのでこれだけは辞退した。ぽかぽかと暖かな雰囲気メドウを、しゃべりながら、写真も一杯とりながらぶらぶら歩いて14:00ベース着。出発の朝から数えたら36時間行動になってしまった。小野木さんと行広さんが、手打ちうどんとお洒落な垂れ幕を作って待っていてくれた。

ロータスも辞書でひいてみた。Lotus-[ギリシャ神話]その実を食べるとすべてを忘れて夢見心地になれるという植物。その果実。]

そういえば、最後はビレイも忘れて夢をみてしまいそうなほど眠い登攀だったな。

- 7/9 レスト。加田、黒田組バスルタワー基部へ無事下降。大量の荷物でつぶれそうになっているはずなので、ベースから1時間ほどのところまで高津君以外の4人でぽかぽかを助けに行く。高津君はそうめんとコーヒーゼリーで祝宴の準備。

久し振りに全員が集った楽しさもあってお祝い気分は最高潮だった。

- 7/10 食糧がさびしくなってきた。砂糖も生米もなくなり、ジフィーズだけの食事になった。スイスチームがグレイシャーレイクへ下降。なんと我々のポータレッジを3台持って下ってくれた。

オーストラリアの2人がロータスを登攀。こちらは15時間で完登。23時、小野木と小林で荷下げに出る。夜のほうが涼しそうなので急に出発を決めた。小野木グレイシャーレイクまで。小林はガレ場下の丸木橋まで、下り2.5時間、登り1.5時間。

- 7/11 本降りの雨になった。小野木、小林レスト。加田、行広で予定していたショートルートは中

## 5. 登山記録

- 止して荷下げに出かける。残る3人も三々五々荷下げする。この日は全員グレイシャーレイクまで。
- 7/12 雨後晴れ。荷下げの中休みの日とする。みんなハラベコになってきた。オーストラリアチームと話す。日本びいきらしく、我々への挨拶にも悪天候を罵るときにも「タマゴドーン！」と叫んでいた。18時、あられが降り出した。
- 7/13 今日でフェアリーメドウとお別れ。全員で記念写真を撮り、キャンプのあとを生活のニオイがなくなるまできれいに片付けて下降。途中本降りの雨に合い、全身ずぶぬれのほっかになった。スイスチームと再会。彼等が釣ってくれた魚で晩御飯にして、キャビンの中で彼等のテントの横に7人並んで寝る。久し振りの暗い寝床に、深い眠りに落ちた。
- 7/14 13時セスナの1便目が到着。8日間のラフティングで街まで下るスイスチームに別れを告げ、加田、小野木、行広、小林が先行。1時間でインコヌーロッジの湖に到着。こちらも静かできれいな所、ロッジのスタッフはフレンドリーで、飲み食いしたい放題のパラダイス。きれいな部屋で温かいシャワーを3週間振りに浴びて、ヒゲも剃って体の芯からリラックスした。手製のおいしいクッキーを果てしなくおかわりしながら居残り組の到着を待つ。23時、退屈と空腹に半殺しにされた高津、前川、黒田が到着。ロッジのオーナーのウォーレンといっしょに遅い夕食をとる。久し振りに陶器の器でする食事は大変文化的に思えた。夜中まで、アンクライマブルズ圏谷の原始の姿を維持する活動に奔走するウォーレンと熱く語り合ったあと、これまた文化的できれいな部屋に寝床を作る。高津、小林は湖の水辺にあるジャグジーにスッポンボンで入る。普通は水着を着けるのだけど、夜中で誰もいないのでこっぴど日本の露天風呂状態。
- 7/15 寝坊してゆっくり朝食。11時、セスナで10分のフィンレイソンレイクへ移動。21時30分、アンディーの堅実なドライブでホワイトホース着。
- 7/16 みんな街で食いまくる。
- 7/17 スイスチームに触発されて、加田、高津、小林でカヌーショップでレンタルの道具を一式借りてユーコン川へワンデイトリップに出る。40キロメートルのとても緩やかな流れで、6時間しゃにむに漕ぎ続けて迎えの車の待ちあわせに間に合った。
- 7/18 空港で、機体に積む荷物の重量で職員とひと採めしてからバンクーバーへ移動。
- 7/19 バンクーバー→名古屋 家族や友達の出迎えを受ける。久し振りの蒸し暑さがとても辛いけど、幸せだった。

### 所 感

水上セスナでグレイシャーレイクに下ろされたあとは、何がどうでもすべて自分たちだけが頼りだった。一見夢をみているような場所だったけれど、町までは空路以外に歩いて帰る道もなく、いつも

野性的な現実の矢面に立っていた。蚊の群に追われ、強烈な紫外線に肌を焼かれながらのぼっかに耐え、冷たい風や雨雪にたたかれながら脆い岩や草のつまったクラックをよじ登るには、文字通り泥臭い逞しさが必要だった。これには今までの登山で培った力が役に立った。

しかしハリソン・スミスの登攀は情報や残置物がたくさんある岩壁への速攻とはちがっていた。せっかちにならずじっくり取り組むことのできるタクティクスや時間の感覚が必要だった。難しいエイドクライミングを含むビッグウォールの経験が無い我々にその感覚はなかった。登っている間中、自分たちが妥当な時間配分で登っているのか、異常に時間を食っているのかわからなかった。その戸惑いに、初めて体験する白夜が拍車をかけた。同じ明るさが果てしなく続くので、時計を見ない限りいつ夜になるのか、時間がどれ位経っているのかもわからずついオーバーワークになってしまった。当然準備段階でも時間の見積りは見当外れで、食糧はまるで足りなかった。日程は倍に見積るべきであった。

ベースに入った後は3つのチームに分かれて活動したけれど、お互いを思いやりながら活動することができた。それを自然にできたことが嬉しかった。大人の自覚をもったメンバーが自分たちのやりたいことを自由に、真剣にやろうとしたということだと思う。

この年の正月から出発までの半年はクラック登攀のトレーニングに集中した。その中で高津君の精進と成長はすばらしかった。日曜しか休めない家業の合間に鴨居で懸垂、何かの隙間を見つければ手を突っ込んでジャミングのイメージづくり、入浴中にもハンドグリップを握り、24時間クライミングを意識し続けてどんどん力をつけていった。その姿に刺激されながら、いっしょに未知の岩壁に想いを馳せながら、トレーニングできて嬉しかった。高津君はそれを半年間の付け焼き刃と言ったが、それは違う。ひとつのルートに登るためだけに情報と過剰な装備に頼って力不足を埋め合わせるようなケチなマネはしていない。どこへいっても通用する実力をつけるための地道な努力を集中的に積んだので、確かな力が急速に体内で育ったのだ。

厳しい試練と、温かい友情と、むき出しの大自然を全身に浴びた3週間だった。この世の常識や自分たちの感覚に照らして、現実的に自力でできることはすべて自分たちでやったつもりだ。いやなことや辛いことから言い訳をして逃げるようなことはせず、山と正面から向き合った。山登りって本来こんな事なんだろうなと思った。うまくいったことも、いかなかったこともあったけれど二度とご免だと思えるようなことはひとつもなかった。全てのことがみんな熱い血肉になって我々の体に蓄えられた。なんのためらいもなく「楽しかった、そして力がついた。」と言える山行だった。